

# モンテッソーリ教育思想の誕生(5)

## 近代社会と知性の形成

早田 由美子

モンテッソーリは医学、生理学、知的障害児治療教育、人類学や生物学、女性解放思想から影響を受けた。また、ルソーやフレイベル、カントなど近代の教育思想家の思想も学んでいる。様々な学問や思想を学んだモンテッソーリは下層の子ども、障害を持つ子ども、そして、女子に対するまなざしを深めていった。下層の子どもは労働のため学校にいけ

ず、障害のある子は精神病院に閉じ込められ、女子には学問や教育は不要とされるか、男子よりも数歩下がった内容が伝えられた。学習の機会は限られ、就学率や識字率には大きな格差が生じていた。

これらの子どもも多くは知の世界から遠ざけられており、知識や技術の獲得にハンディを負っていた。彼らが弱い立場に押しやられたのは、能力の原

理が幅を利かせる近代社会が進展する中で、知の世界から遠ざけられていたことと関連がある。

モンテッソーリはローマの障害児施設で、また、同じくローマのスラム街で教育活動を行い、そこで、知性とは無縁と考えられていた障害児やスラムの子どもや女子にも知的好奇心や集中する心があることを見出した。モンテッソーリが知的教育を進めたのは、まず、知りたい、読みたい、書きたいという子どもの並々ならぬ好奇心を見出したからである。この子どもの発見は、子どもを受容し、子どもをよく見てよく知るといふモンテッソーリの基本姿勢と深い関係がある。また、女性解放思想に学んでいた彼女が、女性を劣等な性と見る当時の偏見に満ちた女性観から解き放たれていたことも女子の行動を偏見を持たずに観察する原動力となった。モンテッソーリは知の世界から引き離されていた子ども

たちに教育を行い、知力の基礎を獲得させる方法を築き上げていった。

では、その教育、特に、知的教育にはどのような特色があるのであろうか。今回はこの点について考えてみたい。

### 生命の援助と知的教育

モンテッソーリには「生命の援助」という基本思想があった。彼女は、教育によって生命を枯渇させるのではなく、生命の開花を援助しようとした。われわれは、勉強をさせると人間の生き生きとした部分が失われると考えがちだが、モンテッソーリは知ることと生き生きとした生命力とは相反さなものであると考えた。考えたと言うより、そのような知に向かう子ども達の様子に何度も出くわし、その経験を生かして活力ある知性の形成がすべての子どもにとって可能なものとなるような原理を確立

しようとしたという方が正しいであろう。そして、そのために、子どもの自由と自発性を重視し、興味と関心に基づいた活動を援助した。

モンテッソーリが「子どもの家」で試みた教育内容はさまざまで、生活の技術に関わるものから、体操や動植物の飼育栽培、手作業や読み書き算数に関するものまで多様であった。それらは、認識能力、言語その他の表現能力、労働能力、家事能力の形成と深く関わるものであった。それらの多くが広い意味で、後の知の発展につながる基本的能力と言えるものである。

### 感覚教育と知性

モンテッソーリ教育の柱の一つは「感覚教育」である。彼女はイタールやセガンの生理学的方法を受け継ぎ改良しながら、子どもが自分の手や目や耳や鼻や舌などの感覚器官を個別に用いて、触ったり、

見たり、聴いたり、味わったり、嗅いだりできるような教具を工夫した。子どもは個別の感覚を用いる練習を通して自分の感覚機能そのものを意識するとともに、ものさまざまな性質を段階的、体系的に知る。そして、自分の感覚を振り所にしてものを確実に知る。その際、注意深く見る、比較する、判断するなどの活動を行う。これらの活動を通して、認識力、思考力や分析力、集中力といった知的能力が形成されていくのである。ものや環境に対する関心をもつこと、それに対する見方を学ぶこと、集中してものを見ること、そして、ものの相違を注意、比較、判断することによって理解し考える力を持つことは知性の基礎と言えるであろう。

また、モンテッソーリは、感覚教育を知性の形成と結びつけただけでなく、自己教育とも関連づけた。感覚を刺激することで子どもの興味を喚起して自主性を呼び起こす。子どもは感覚を用いて確認す

ることにより自分で答えを見つける。好きな作業を繰り返すことによって自然に活動を完成度の高いものにする。自分で誤りに気付き、自分で訂正する。この自己教育という考え方は、感覚教育にとどまらずモンテッソーリ教育の中心的概念となっていたのである。

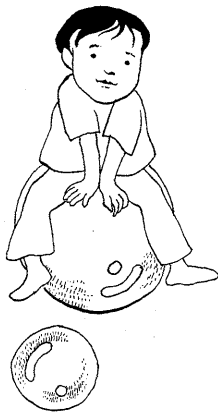
### 知性の基礎としての読み書き算数

モンテッソーリは書く、読む、数えるという言葉や算数の分野も独自の形で発展させた。

彼女は、はじめ、幼児教育にこの分野を導入することに疑問をもっていたのだが、子どもの知りた、読みたい、書きたいという要望に出会い、それに応えようとした。

モンテッソーリは、公式の学習や概念の単なる伝達は行わなくてよいと考えており、子どもたちが観察し、分析し、新鮮な発見をするまで待つことを基

本とした。しかしただ待つだけではなく、子どもの気持ちに沿えるようにできるだけ「合理的な方法」を模索した。そして、子どもが理解したり模倣したりする場合、過度の努力をしないで済むように「容易に成し遂げられ、無限に広げられる征服の喜び」に変えられるように工夫した。つまり、発見や理解を容易に導くための様々な工夫である。その際、すぐに目的とする活動を行うのではなく、目的を無理なく達成することができるようにその準備のための活動（例えば、運動能力、作業能力の養成）を、子どもの能力や関心に合わせて充実させようとする。



した。

また、医者であったモンテッソーリは文字の読み書きを医学的生理学的メカニズムの中で捉えようとした。言語の構造と感覚、運動、脳との関係を考察することによつて書き方や読み方を容易に楽しく、確実に学べるようにしようとした。

例えば、書き方に関しては、次のような順序で進めた。はめ込み形をなぞつて図形を書く。図形の内部を色鉛筆で塗る。サンドペーパーでできた文字を（目を閉じて）なぞることを繰り返す（これらの動きは、実際に文字を書かないで書く準備となる動き〈筋肉運動〉を繰り返すことで手の運動能力を向上させるという意味がある）。さらに、カードの文字を仕切り箱に入れる。アルファベットの文字を組み合わせて単語を構成する（これらは文字の比較と選択を通して文字や単語の構成を認識するという意味を持つ）。

こうして手の動きと文字の認識の両面からアプローチすることによつてそれぞれの能力を高め、誰もが自然に、無理なく、文字を習得できる方法が考えられたのである。

### 知る喜び、分かる喜び

重要なことは、子どもたちの活動が「新鮮な発見」、「知る喜び」、分かる喜び、できる喜びに満ちあふれているということである。モンテッソーリは子どもの知への喜びの場面をしばしば表現している。

例えば次のようなくだりがある。

「それらの最初の日々、われわれは激しいまでの感動にわれを忘れた。あたかも夢の中にいるようであり、何か奇跡的なできごとに居合わせているかのようであった。はじめて一つの言葉を書いた子どもは大変大きな喜びで一杯であった。私はすぐに彼を産

卵したばかりの雌鳥にたとえた。本当に誰もその小さなやかましい発表から逃れることはできなかった。彼は誰にでも見るように呼びかけ、動こうとしない人には、衣服をつかんで無理やり連れていこうとした。皆、書かれた言葉のところに行かなければならなかった。そして、その素晴らしさをほめたたえ、驚きの叫びを幸福な作者の喜びの叫びに合わせることになった」(『科学的教育学の方法』)。

子どもの様子は喜びと驚き、そして、自信にあふれている。

また、指示が書かれているカードを子どもたちが選択して読み、指示に従って活動をするゲームでは次のような記述がある。

「私が書き終わるやいなや、子ども達はカードをつかみ、インクを乾かすために机の上に置き、わき目もふらず注意を集中させて自発的に読んだ。静まりかえる中で。私はそれから尋ねた。『理解できます

か』『はい！はい！』『それではカードが告げていることを行いなさい』そして子どもたちがめいめい敏速に、一つの活動を選び、それを正確に行うのを感じて見た。その時偉大な活動、新しい種類の動きが部屋に生まれた。日よけを閉めて、再び開けるものがいた。他の子達は仲間を走らせるか、または歌わせていた。字を書きに行くものや食器棚に物を取りに行くものもいた。驚きと好奇心が全般的な静粛を生み出していた。その素晴らしい行動は激しい感動の中で展開した。魔法の力が私から出て、これまで未知であった活動を刺激しているかのようであった。この魔術は、『文字言葉』、すなわち、文明による最も偉大な成果であった」(『科学的教育学の方法』)。

この活動の中には、多様な内容が含まれている。文字を読んで理解すること、理解できる喜びによって自発性が引き出されること、文字による指示を通

して様々な活動が行われること、一人でする活動だけではなく、他の子どもへの依頼や働きかけ、参加と協力が必要な活動が含まれていることなどである。モンテッソーリはこのような子ども達の動きを「自発的規律の予期しなかつた完成」とも述べているが、様々な要素が織り成す中でこのような喜びの中で行われる活動が構成されたと考えられる。

### 限定性と普遍性

モンテッソーリは書き方も読み方も、子どもが行いやすいこと、分かりやすいこと、興味をもつことをまず行い、それを熟達させて、次のステップに進む方向を考えた。学問の系統性や体系性を重視し、誰もが基礎的内容を着実に段階を踏んで習得できるように整理して示そうとした。子どもは無理なくできる事柄から始めるので安心して繰り返し行い、知的好奇心を継続させながら次のステップに進む。

しかし、モンテッソーリの方法には限定的な面もある。教具は一定の使用方法にそつて使わなければならない、定められ

た目的以外の目的のためには使用できないということである。子どもの活動が教具に規定される面をもち、その限定性は子どもの創造性を妨げるものとして批判の対象にもなっている。

しかし、その限定性によつてモンテッソーリ教育法の普遍性もたらされたとも言える。教具の目的と方法を定めるといふことは、教具を通して伝える内容を限定するということを意味するが、それは逆に言えば、子どもが習得する内容がはっきりしているということである。その内容はモンテッソーリが多くの教具を試す中で子どもが習得すべき基礎とは



何かの吟味を行いながら、子どもの興味に合わせて取捨選択して導き出されたものである。各々の教具が伝える内容は限定されるが、教具の豊富さによって多くの内容が確保されている。自由な活動という原則の中で、好きな作業（教具）を選びながら最終的にはどれも体験することによって、どの子どもも同じ基礎的内容を確実に学ぶことになる。

モンテッソーリは誰もが就学前に学ぶべき基礎を選び明確な形で提示した。感覚を刺激し、興味を引き出しながら、認識力、思考力、分析力、集中力などを形成し、知性の発達へ導こうとした。

しかし、すべての子どもが自由の中で同じ目標に到達するかは分らない。自由のなかで、子どもははじめに興味をもって活動に打ち込めるが、それにより子どもの格差が拡大する可能性はある。それを個性とみなすのか、埋め合わせるのか。自由によってもたらされる格差についてモンテッソーリは言及し

ていない。

モンテッソーリはむしろ自由な活動で興味を持って物事に向き合うことを重視し、それによって子どもの「生命力」を援助しようとした。それを基本として、どのような子どもも知性を育める教育システムを確立しようとした。人間が生まれ持っている共通の感覚を教育することを通して少なくともスタートの地点では同じ認識能力の基礎作りをめざし、幼児に対しても知の扉を開こうとしたことはモンテッソーリの独自性である。

激しい階層差別や性差別、劣悪な生活環境の中で育つ幼児に対して、家庭環境や性別役割規範によってもたらされる不利を認識能力、すなわち、知性の発達の基礎を形成して補おうとした点にモンテッソーリの思想の歴史的意義があると思われる。

（夙川学院短期大学）